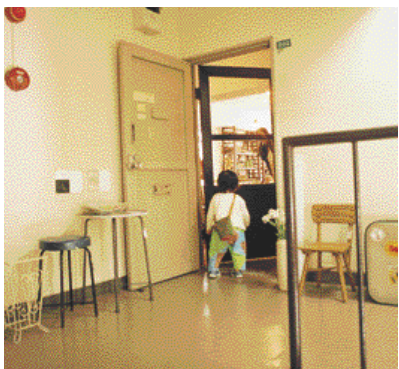


妻、母、ショップオーナー どの自分もまだまだ でも、時々いいかんじ

夫。子ども。自分の仕事。どれも大切で自分の人生に
欠かせない存在。でも、両立するのはなかなか難しく
ようやく自分のペースを掴み始めたお母さんの話です。



築30年以上の古いマンションの2階にある「manon」。震災以来、再開路がすすんだ西宮では珍しい味のある建物だ。もとは3LDKの間取りだったが、オーナーさんが「若い人が何かやってくれるのなら」と好意でフルスケルトンにリフォームしてくれた。内装は、愛子さんとスタッフのほぼ手づくり。難しいフローリング貼りも友人と一緒にDIY



兵庫県西宮市。阪急西宮北口駅から
繁華街を抜けて10分ほど歩くと、「nite
(ニテ)」の看板が見えてきた。3坪ほ
どの店内には、ぎっしりとヨーロッパ
の布やボタン、糸、裁縫道具が並ぶ。
尾崎愛子さんが「nite」を開いたのは
今から6年前の27歳のとき。自分の好
きな布やものを扱いたいと、若くして
お店を開くことにした。
「母も、好きなものを扱ったお店を開い
て楽しそうに働いていたから、お店を
持つことに不安はなかったです」
そして、4年前には、もっと広い場
所で、布以外の好きなことをやりたい
と、「nite」から5分の場所にアンティ
ークや雑貨を扱う「manon(マノン)」
を開いた。「雑貨屋さんだったら、人の
多い神戸や大阪でどうしてしないの」
と多くの人に聞かれたけれど、愛子さ
んは地元で、と決めていた。阪神大震
災以来、そして「nite」を始めてから
は特に、自分が住む街に改めて愛着が
わいて、やるなら地元の人に大切にさ
れる店を、と考えていたからだ。
そうして、ふたつのお店を切り盛り
する日々が始まった。信頼できるスタ
ッフもいて助けられながらも、めまぐ
るしく働き、時間はあっという間に過
ぎていった。



お母さんのお店「manon」「nitte.

70年代の花柄やオーストリアの子ロリアンなどデッドストックの布、ボタン、リボンなどを扱う「nitte」と、ヨーロッパで見つけたアンティークの日用品や作家さんの雑貨を扱う「manon」。形は違っても、どちらも愛子さんの好きな世界

<http://www.nitte-manon.com/>



1年ほどして、現代アートを学びにドイツに留学をしていた耕将さんの帰国を機に一緒に暮らし始める。耕将さんは、愛子さんのお母さんが言んでいた骨董店を手伝い、そして、受け継ぐことになった。

賃料や人件費のことを考えると、お店をひとつにしてもよかつたのでは？という質問に、「あんまりそういうふうには考えなかつたなあ」と愛子さん。夫婦で好きなものや方向性は似ているけれど、微妙に違う。それぞれの好きなことを、それぞれが追求したい。もちろん、相談に乗ったり手伝ったりすることはあっても、お店は自分の表現の場所だから基本的にはひとりりで向き合いたい。ふたりともがなんとなくそう思っていたから、別々にお店を続けることは自然な流れだったようだ。

家庭と仕事。愛子さんにとっては両方とも大切だから、育児も仕事もセーブせず全力で取り組んできた。

でも、のいちゃんが生まれて愛子さんの考えもずいぶん変わったという。「大変でも自分でやりたい」と、多少無理をしていたことも、人をお願いするようになった。毎日立っていたお店も今では週の半分以下に。自分で行っていたヨーロッパへの買い付けはスタッ